

國學院大學學術情報リポジトリ

富士信仰の大衆化に対する一考察：
江戸時代における富士講を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 温, 莉莉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001553

富士信仰の大衆化に対する一考察

——江戸時代における富士講を中心に——

On the Popularization of Faith in Mount Fuji---Centring upon

Fuji-kō Cult in the Edo Era

温 莉 莉

要旨

人類は未開の段階から、自然に対して畏敬の念を抱き、自然万物に信仰を寄せていた。特に連綿と繋がる山岳が国土の根幹を形成する日本では、山岳信仰の対象となった山は 350⁽¹⁾余りにのぼるといふ。厳しさを持つとともに親しみのある山岳は日本人の生活史、精神文化史で無視しがたい重要な意義を持っていた。その中に、特に日本の最高峰である富士山が「信仰の対象」と言われ、それに対する宗教行為は早くも縄文時代までに遡る。

富士信仰は富士噴火に対する畏敬の念から生まれ、さらには宗教的にも地域的にも展開が見られてきた。しかし、富士浅間信仰の段階にせよ、富士修験道の発達にせよ、富士信仰は一般庶民の生活に浸透できなかったのである。江戸時代になって、富士信仰は漸くその大衆化を実質的に実現できたとされている。そして、富士信仰の画期的な展開は、近世中期以来活躍していた信仰団体「富士講」と大いに関係があると考えられる。「富士講」は富士信仰を持つ人々によって自主的に結成され、富士参詣を定期的な講社活動とする団体である。文化文政期において、富士講は江戸地域で「江戸八百八講」⁽²⁾と歌われるほどの隆盛を極めていた。

以上のことから、本稿は江戸時代における富士信仰の大衆化に着目し、江戸地域の富士講を対象として、その組織構成や運営方式を研究する所存である。そして、その特色をまとめ、分析した上で、富士講がいかに富士信仰の大衆化を促したかについて考察するものである。

キーワード：富士講 富士信仰 江戸時代 大衆化 組織運営

关键词：富士讲 富士信仰 江戸时代 大众化 组织运营

(1) 下出積興、『古代日本の庶民と信仰』[M]、弘文堂、1988年、P7。

(2) 八百八町は昔江戸の町全体の称。江戸八百八講は富士講の数が江戸全体を含めるほど多く存在したことをいう。

本稿は五つの部分からなっている。その方法は、時代背景を考慮しながら、富士講自体に対して考察を行うものである。結論として、富士講は救済性・開放性・簡約性を備えていることが導かれた。そして、これらの特性が、講の日常活動と講員たちの行動様式に大きな影響を与え、富士信仰の大衆化を進めたといえる。

摘要

人类从未开化的蛮荒时代开始，便对自然充满了敬畏之心。自然万物由此成为了人们信仰的对象。这一现象在山岳纵横的岛国日本尤为明显。据统计，在日本的国土中有 350 余座山脉被当做信仰的对象。既让人畏惧又充满亲切感的山脉在日本人的生活史，精神文化史中具有不可忽视的重要意义。特别是众所周知的日本最高峰——“富士山”，被誉为“信仰的对象”，早在绳文时代开始就是人们祭拜的对象。

富士信仰的诞生源于人类对富士山的火山喷发而产生的敬畏之心，在那以后富士信仰的宗教内涵不断获得充实，地域分布也随之不断扩大。但无论是最初的富士浅间信仰，还是其后流行的富士修验道，富士信仰都未能真正融入到普通百姓的日常生活中去。直到发展至江户时代，富士信仰才实现了真正意义上的大众化。这一突破与近世中后期以来活跃在民间的信仰组织“富士讲”有着密不可分的关系。“富士讲”是秉承富士信仰的普通百姓们自发缔结的组织，他们把攀登富士山，祭祀参拜等活动作为例行的团体活动。文化文政时期，富士讲在江户地区盛极一时，曾发展到“江户八百零八讲”的庞大势力。并且富士讲的教义理念和活动形式广为流传，发展成为明治维新后部分民众宗教（丸山教、扶桑教和实行教）教义思想的雏形。

因此，本文着眼于江户时期富士信仰的大众化，以江户地区的富士讲为研究对象，对富士讲的组织构成与运营模式进行综合研究。通过研究分析，归纳富士讲的特征，解析其如何推动实现了富士信仰的大众化。

本文由五部分构成。正文部分包括三节，对富士讲组织本身进行研究结合江户中后期的社会背景，分析出其具有救济性，开放性和简约性的特征。从富士讲的组织形式，运营模式角度，概括出以上特征在富士讲推进富士信仰的大

众化的进程中有着深远的影响。

はじめに

「自然は宗教の最初の原初対象であり、これはすべての宗教と民族が証明してくれたものである」⁽³⁾とフォイエルバッハ⁽⁴⁾が『宗教の本質』で指摘した通り、人間は自然界のあらゆる物事が具体的な形象を持つと同時に、それぞれ固有の靈魂や精霊などの靈的存在を有するとみなし、諸現象はその意思や働きによるものとみなす傾向がある。いわゆる「アニミズム」の信仰傾向と宗教発生は天災地変の多発する日本では特に顕著である。国土面積の約73%が山岳である日本では、山岳信仰の対象となった山は350余りにのぼるという。

周知のように、日本一の富士山（標高 3776m）は活火山である。富士噴火に対する恐れから、富士山に対する素朴な祭祀行為が発生した。それは縄文時代までに遡ることができる。そして、噴火を掌る「浅間大神」⁽⁵⁾を祀る神社の建立を以て、富士信仰が発足した。のちに、「浅間大神」は仏教の伝来に伴って、浅間大菩薩（仙元大菩薩）に変身し、富士信仰は山岳修験道の典型となった。宗教方面において、富士信仰の内実はますます豊富になった。

しかしながら、富士信仰の芽生えは極早いものであったにも関わらず、それが「名実と共にかね備わり、広く一般の民心を支配して、社会の一大勢力たり得たのは実に江戸時代であった」⁽⁶⁾と井野邊茂雄は指摘している。『広辞苑』（第五版）の説明によると、一般庶民に広まり、親しまれることが「大衆化」と定義されるように、江戸時代に至って、富士信仰の大衆化が漸く実現されたと言っても差し支えがなかろう。

富士の信仰は長い年月にわたって、民衆の間に浸透し支持されてきた。その最大の理由は、言うまでもなく日本一の山富士山の神への畏敬と信仰である。一方、その自然成立の信心を支えてきた人と組織の存在をも考えなければならぬ。山岳修験道の発展に伴って、富士山は室町時代になって、既に

(3) 筆者訳。原文：自然は宗教最初の原始対象、这一点是一切宗教、一切民族的历史充分证明了的。フォイエルバッハ著、王太慶訳、『宗教の本質』、商务印书馆、2010年、P2。

(4) ドイツの唯物論哲学者。ヘーゲル哲学を批判し、思弁哲学は神学であり神学の秘密は人間学であるという立場から宗教を批判、マルクス・エンゲルスに多大な影響を与えた。著『キリスト教の本質』など。

(5) 浅間は信州（現在の長野県）の火山で、のち浅間神は荒ぶる火の神の代称になる。

(6) 井野邊茂雄、富士の研究Ⅲ『富士の信仰』、古今書院、1929年、P5。

多くの富士道者を迎えており、富士修験や富士参詣を主体とする団体が出現した。そして、近世に至って、山岳信仰を旨とする講組織が続々と生まれ、「富士講」はその代表である。「富士講」は富士信仰を持つ人たちが自主的に結成し、富士参詣を定期的な講社活動とする信仰団体である。近世中期以来、目覚しい発展を遂げ、関東一円に急速に広まり、関西にも及び、富士信仰の普及に大きな役割を果たした。ちなみに、富士参詣の登山者に宿泊を提供する御師の記録によると、富士講が流行する以前の寛政五年（1793）ごろ、富士参詣の人には、東北各国の村民が多かった。また、三重県の「富士まいり」⁽⁷⁾は信仰形態が富士講とは別種の富士信仰の民間団体として存在した。さらに、岡山県川上郡吹屋（現在の成羽町）では、三年ごとに富士参詣をする習俗があった。つまり、近世において、経済力と交通の発展に伴って、富士信仰をもとにする信者や信仰団体が少なくなかったのである。

しかし、富士信仰の諸組織の勢力と影響から見れば、「江戸八百八講」と歌われるほど、関八州を中心とする「富士講」の勢力と比肩できるものはない。富士講は富士登拝を定期的な講社活動とする信仰集団として、文化文政期において「江戸八百八講」の隆盛を極め、富士信仰の大衆化を実現した。その展開の流れを考察すれば、戦国時代の最中に富士修行を行っていた教祖角行から、およそ百年を経て身禄まで、「富士講」と呼ばれるものはなかったのである。天文元年（1736）に、身禄の死後三年目に弟子高田藤四郎が興した「身禄同行」をという講を始めに、身禄の弟子たちは、この講づくりに専念した。それから富士講の組織形態が次第に整えられ、講員拡大と富士信仰の普及を促した。

従って、本稿は富士講の組織運営に対する研究を通して、富士信仰の大衆化を考察してみようと思う。富士講がいかに運営されたのか、富士講がいかなる魅力を持って、当時の信者たちを納得させたのかなどの問題を抱えながら、本研究を進めていきたい。

1 富士講の救済性

（1）社会背景と信仰動機

天災地変の多発する日本では、不可解なる自然万物に対して、アニミズム

(7) 三重県の答志島にある。12年目ごとのサル年に登山した。船で駿河までゆき往復5日かかった。

の信仰心が自然に養成されたが、そのほかに、不安定な社会背景も信仰の形成と展開を促した重要な要素である。特に社会の根底部にいる一般民衆にとっては、神の力で救われたいという利益的な要求が一層顕著である。

中世末、戦国時代に入って、戦乱に耐えられず、山岳修験によって、救いの道を求める廻国の修験道者は一層多くなった。富士講の鼻祖と仰がれる長谷川角行（角行藤仏）（1541～1646）もその一員である。角行に関する伝記は何点もあるが、乱世に生まれ、18歳の時故郷長崎を出て、東国・奥州などで修行し、のちに主として富士山西麓の人穴で修行を極め、最後は106の高齢で富士人穴で入滅したのがその共通の内容である。そして、その修行の内容としては、百日百夜の断食、七日の不眠、四寸五分角四方の木の上での爪立行⁽⁸⁾など、普通の人のなし遂げがたいものばかりである。特に、他の修験道者と大いに異なる、注目すべきことは、角行の修行の目的である。それは一身一家の安寧幸福を祈るのではなく、「天下泰平国土安穩万民快樂」⁽⁹⁾のための祈願である。度重なる厳しい修行を通して、角行は浅間大菩薩の庇護をかなえ、しばしば浅間大菩薩の霊告を授かり、富士講独特の「御身拔」⁽¹⁰⁾、さまざまな「御文句」⁽¹¹⁾「御風先休」⁽¹²⁾を創始した。そして、これらの呪文護符の類を衆生に授けて、病氣治し・安産・雨乞いなど民衆の現世利益的な要求を満したという。これらはのちに富士信仰の主要なものとなり、富士講の展開においても貫かれていた。

そして、江戸時代に入って、社会が比較的安定し、民間主導で商品作物の栽培の増加とそれにとまう貨幣経済が進展したが、町人の経済力と地位が上がったのに対して、支配者である武士階級の経済的窮乏が目立ち、一般農民の生活もますます窮乏化していった。江戸時代中期以降、享保（1716～1736）・寛政（1787～1793）・天保（1842～1844）年間に行われ、いわゆる近世の三大改革の実施にもかかわらず、年貢の増徴、農村全体に対する商品経済の浸透と共に、地主・富農の発展と貧農の没落が同時に現れ、各地に百姓一

(8) 角行という法名はすなわちここに由来する。

(9) 村上重良・安丸良夫編、日本思想体系 67『民衆宗教の思想』『角行藤仏記」、岩波書店、1971年、P457。

(10) 行者が仙元信仰に透徹して、神にかかわって講中に論すため、神と一体となったものとしてのわが身から抜き出したものの意で、富士信仰の神格や世界観を集約的に表現する。角行の身拔には、神・儒・仏・陰陽説と、富士講独自の富士山を神とする信仰観念が、複雑に習合した文字や図形で記されており、信仰の対象の依代とされる。仏教の曼荼羅と共通した性格をもっている。

(11) 拝みの文句である。後年の富士講徒が月ごとの法会の席で唱和する唱文の内容になる。

(12) 「よけ」（除災）である。仙元神より授けられたものとして、疫病災難などを呪力によって避ける御符、またはお守り類のもの。

掬が勃発するなど、社会的矛盾が次第に深刻化してきた。

これを背景として、富士講の中興を実現し、角行の道統を汲む六世の食行身禄（1671～1733）は師の「万民救済」の思想を受け継ぎ、富士信仰の内実を更に発展させ、富士講の呪術性の脱却に励みながら、富士信仰の大衆化をさらに進めた。

身禄は寛文十一年（1671）に、伊勢国に農民の子として生まれた。13歳から江戸へ出て、いくつかの職に就いた後、油商を営んで財をなしたという。17歳から、彼は富士信心に入り、朝夕の水垢離、月四回の式日を努め、毎年の富士登拝を熱心に続けていた。そして、それまで富士行者が行っていた修験的な呪術、加持祈祷には信仰の主体をおかず、新たな実践倫理道德を訴え続けた。

享保十年代から、身禄の宗教活動は急速に活発化した。それは当時不安定な社会背景と密接な関係がある。享保十年代に入ると、飢饉・物価騰貴と一揆・打ちこわしなどが頻発した。身禄はこうした世情を憂え、社会的不安におびえ動揺している民衆に、庶民中心の世の中にかわることを予言する「おふりかわり」の成就を祈願し、断食して富士山に入定することを決意した。

享保十七年（1732）に、イナゴなどによる害で近畿以西の大飢饉があり、餓死は一万人以上と推定される。幕府は被害のない地方から救援米を送らせたので、江戸でも米価が高騰し、翌年の正月に江戸の最初の大規模な打ちこわしが起きた。これに際して、身禄は救世の理想のために、享保十八年（1733）に、三十一日の断食修行後、富士山七合五勺の鳥帽子岩で入定⁽¹³⁾した。そのときから、身禄は江戸庶民の間で名を挙げ始めたのである。

（2）富士講の呪術と多種多様な御風先俵

前述したように、角行が度重なる難行を重ねてきたが、それを一つ果たすごとに、浅間大菩薩から衆生守護のための呪力が与えられたという。形として、「御身拔」、さまざまな「御文句」、「御風^{おふう}先^{さき}俵」を作った。例えば、近江の琵琶湖では「世界のために病難を助くる秘文」が、本須湖では「安産早めの御ふせぎ」が、四尾連湖では「てんかんのふせぎ」⁽¹⁴⁾などが創造され、万人の病苦災難を払うための角行の呪力が次第に豊富になっていった。

(13) 入滅を指す。

(14) 平野栄次編、民衆宗教史叢書第16巻『富士浅間信仰』[M]、雄山閣、1987年、P196。

その中で、特に御風先休は一枚の紙切れで、何とも知れない文字が書いてあり、女性の月経不順を治すとか、子供の夜泣き、中風予防、病氣平癒、あらゆる日常生活にある病氣災難などの不順、となりの犬の遠吠えまでを解消できる霊力を持っている。角行の自筆文書とされる『諸神法の巻』には、各巻に奇妙な記号とも図形とも見られるものが総計百五十種⁽¹⁵⁾も並び、すべて日常生活と密接に関わる祈願である。「てんかんによし、熱によし、喉の乾くによし」などの体の変調に対するもの、また「あづき、小麦、もち、そば」など作物の病を防ぐ守りなどの書き様を示している。

上述した豊富な呪術は、一般信者の信仰動機、つまりその現世利益的な要求に直接に応えられるもので、富士講の布教に貫いて、信者の吸収に大きな役割を果たしていた。元和六年（1620）の頃、江戸では「突きたおし」⁽¹⁶⁾という流行病がはやり、これによって死んだ人は多かったが、角行は御風先休で、立所に病人を癒したという。その後、江戸での評判はにわかに高く、角行の名は一時に広まった。

然に武州江戸にて突きたをしといふ病はやり、治る事不叶、三日の内に死ること幾人といふ事なく、御公儀よりも色々療治被下といえ共、其印なし……師匠書行え申候処に、御風先休被下、これを持罷下り、病人に為戴候処に、壱人も不残平癒仕。夫より江戸入口に高札を立、千人供養三日の内に成就。一日に百拾人余の病人罷越候故、江戸中にかくれなき。⁽¹⁷⁾

また、角行の四世の弟子である月旺は熱心な教義研究者であり、角行の御風先休の勉強に専念したため、「なにやら不思議な文字を書く行者」として、吉利支丹の布教と疑われ、幕府より審問を受けることになった。『月旺居士公事之巻』に月旺が奉公への答えとして、以下の記録がある。

元祖角行藤仏　富士信心し大行人穴富士浅間の御夢想にて　此封守り
書出し　毎年富士参詣の者共心よく参詣仕候　富士山高く雲霧雨嵐はげしく　山によい頭痛仕候　雪水を用い（食べ）得ば腹中のもめて腹心あし

(15) 岩科小一郎、『江戸庶民の山岳信仰—富士講の歴史』[M]、名著出版、1983年、P59。

(16) ばたばたと人が倒れる流行病。コレラ・赤痢の類。

(17) 角行藤仏記、村上重良・安丸良夫編、日本思想大系 67『民衆宗教の思想』[M]岩波書店、1971年、P479。

く 足手筋はり迷惑仕るとき 右の守を切て封に仕り用い（飲ませ）候得ば 五人が五人 十人が十人そのまま気分よく罷り成下向仕候 国元にても拾人の病人 四五人宛直り申候 死病持病とて封の力に及ばず 狐付五人の三四人まで直り おこり ふるいも同様 平産十人が六七人産かるく仕候 風先休は口伝仕候 只今まで書写し出し申候 後生のため故 守封は一銭も礼物とらずとらせ候。⁽¹⁸⁾

引用の中の「封守り」はつまり御風先休のことで、ここからその便利な使い方と靈驗効く様が伺える他に、報酬を一切取らず救済を行う布教活動も見逃せないことで、まさに富士講の衆生救済の旨と一致するものである。

古より今に至るまで、宗教者と庶民の結びつきは、わざわざを避ける力に対する信頼が大きなきずなになっている。近世中期に登場した食行身禄は角行以来富士講の呪術的性格を否定し、教義や行法を実践道徳的な方向に変換しようと試みたが、病氣や災厄から逃れたいとする講徒の素朴な願望は、依然として富士信仰を祈祷や呪術を中心とする方向に変容させ、講集団の増加と拡大が行われていった。

(3) 富士先達

発足した段階において、呪術の靈力で信者を引き付ける富士講は、その展開と布教の過程においても、講組織の中に呪術を担う役、つまり先達が存在が特に重要な意義を持っている。

富士講は富士登拝を定期的な講社活動とする信仰団体として、先達の根本的な義務は信者の登山を導くことである。そして、彼らは修験道本流の行者と異なり、拝むことを生計とする僧侶でもなく、通常それぞれが家業を持ち、業余の行としての信者である。また、先達の資格も出生や身分に関係なく、富士信心に入り年々登山を続け、師匠より伝えられる「お伝え」唱文を学び、その行が深められ、高められることによって、誰でも先達になれたのである。

九字を切り⁽¹⁹⁾、御ふせぎを配り、焚上げ⁽²⁰⁾を行うなど、先達が病氣を治

(18) 岩科小一郎、『江戸庶民の山岳信仰—富士講の歴史』[M]、名著出版、1983年、P303。

(19) 中国から伝わったという。護身の秘術で、密教の九字真言「臨兵闘者皆陳列前行」と唱えながら、指差しを空中で交差した縦線を四条と横線を五条と書き、守りを祈る護身法である。

(20) 線香を火鉢の中に積んで焚く。焰は一メートル以上も立つ。いわゆる清めの火で、焰が立った時、先達は「お願い」を書いた紙を火の中にいれ、宙に舞って昇る紙の灰を見て占いをする。病人、失せ物などを頼まれることもある。

し、災難を払い、豊作を招き、天候を予言する霊力を持ち、さらに「先達を慕うこと親を見る」ように講員から親しまれる人柄が望ましい。庶民たちにとって、町や村の富士先達は、20年、30年と富士へ登り、富士登拝を導く案内人というよりも、富士山へ参ることによって仙元大菩薩から霊力を授かり、富士山の御加持祈禱を自分たちに伝えてくれる媒介者で、呪術で自分たちを病気・災難などから救い出す存在である。このような存在は全ての講にあり、全組織のリーダーとして尊重されていた。

民間信仰は殆ど現世利益的な性格を持っている。民衆の利益的要求というのは、おそらく病気をなおし、五穀豊穰など生活に密接に関わる素朴かつ具体的祈願であろう。一般信徒の現世的利益要求を満たし得る宗教活動または信仰組織は、当然容易に受容されると思う。このように、江戸時代に富士講の布教における御風先休を代表とする霊験効く呪術にせよ、衆生救済を使命とする先達にせよ、当時の社会不安におびえ動揺している庶民たちに実質の利益と多大な慰めを与え、すぐ受容され、信者の中に浸透できたのだと思う。要するに、富士講の展開に伴い、一般信者の現世利益的な信仰動機に答え、いわゆる衆生済度から出発し、加持祈禱で万民の病苦災難を払うための富士講の救済性が富士信仰の大衆化を促したのだと考えられる。

2 組織の開放性

(1) 信仰の階級的範囲

富士信仰なるものは、主として町人・百姓の間に行われた。「それは各登山口の道者帳を見れば、直ちに了解せられるのみならず、富士講や、富士行人・富士垢離行家の徒も概ね百姓・町人であった。」⁽²¹⁾という。富士講の元祖である角行は「万民快樂」のために信心の道を開いたが、その流れを汲む弟子日旺・旺心・月旺・身禄、さらに不二道⁽²²⁾の先覚伊藤参行⁽²³⁾、小谷三志⁽²⁴⁾

(21) 井野邊茂雄、富士の研究Ⅲ『富士の信仰』[M]、古今書院、1929年、P446。

(22) 身禄派の富士講から発展してきた。二つとない講の意で、それまで富士講の呪術的性格を一切抜き、倫理道德を唱える。

(23) 江戸時代中期一後期の宗教家。江戸浅草で彫物業をいとなむ。身禄の三女お花に教えをうけ、身禄派をつぐ。加持祈禱などの行を排し、四民平等を説いた。門弟に小谷三志がいる。本名は花形浪江。著作に「四民の巻」、「御ふりかわり」がある。(1746—1809)。

(24) 江戸時代後期の神道家。名は庄兵衛、道号は禄行。富士講第八代教主で講の中興者。布教に努め、道德的実利的な教えにより庶民の間に多くの信者を得た。

(1765—1841) はみな町人であった。こういった富士講の先覚たちの出身は社会底辺部にいる数多くの民衆たちに共感を覚えやすいゆえに、その教勢は急速に町人・百姓の間に広まりつつあった。しかし、富士講を奉ずる人は必ずしも町人・百姓のみではなかった。身禄の門人小泉文六郎は関宿の藩士であり、文六郎の隣に住んだ同講中の岩田小四郎も武家であろうと推測されている。

なお、「四民の巻」⁽²⁵⁾に、身禄には「女中の御弟子五六人」あったという記録から、大名の家中にも富士講と富士信仰の波及が分かる。この他に、身禄派の流れを継ぐ永井照行は、幕府の紅葉山御庭方⁽²⁶⁾同心であり、伊藤参行の門人八行真中(呉服商)もまたその教えを武士の間に広めた。記録には「八行と申者、六ヶ年(享和元年)以前大御番頭長谷川頼母妻御傳授り、夫同人嫡子市十郎、段々と此傳授…当時は御家中に而も、かれ是此傳へ授り候面々七十人餘りも御座候」⁽²⁷⁾とある。七十人余りの盛んな集会から、八行の積極的な布教行為が想像でき、さらにそれに対する良い反響が見える。また、(伝授の)「委細之儀は、長谷川市十郎、并儒者竹内興三右衛門、右兩人之者は、別れて此傳之儀得とく仕罷在候間、御目近被為召、いさいのわけ御尋被下置候はば、一々奉申上に而可有御座候」⁽²⁸⁾とあることから儒者と富士信仰の関係も捉えられる。

さらに、大身・旗本⁽²⁹⁾の間にも、富士講の行者を招いて祈祷させるような風俗が、かなり広く行われていたようである。江戸の世相風俗について記された日記風の『わが衣』⁽³⁰⁾文化十一年の条に、以下の内容がある。

富士講と名付ける物、……天明の始頃より流行せしが、其後御制禁相成たりといへども、年々富士へ登山する者多きゆへ、又いつの頃よりか發起して、近頃は諸歴々も此中に加り、一筋に御助けたび給へと、大聲上て念仏を申たるは、目もあてられぬ事也。本所邊に二千石計の御隠居、行衣を着て供をつれ歩行せしが、何かの事露顯して、今とし四月の中旬

(25) 身禄の弟子である伊藤参行の著作。

(26) 藩邸庭園の手入れが任務の卑職である。

(27) 井野邊茂雄、富士の研究Ⅲ『富士の信仰』[M]、古今書院、1929年、P447。

(28) 同上。

(29) 江戸時代、將軍直属の家臣のうち、知行高が一万石未満の直参で御目見以上の格式のあった者。

(30) 加藤曳尾庵(1763—没年不詳)著、江戸の世相風俗を記した日記風の随筆、全19巻がある。

又御觸有りて、此富士講御制禁になりたり。⁽³¹⁾

これによると、「諸歴々」と「二千石計の御隠居」なども富士講に参加することが分かる。このように、富士講またはその富士信仰は町人・百姓から発足したが、必ずしも低級なる民衆の間にのみ行われたものではなく、武士・儒者・貴族階級にも及び、相当広い範囲に涉っていたことが推測できる。

(2) 女人登山

仏教でいう女人不浄説では、「日本の山々、殊に靈山と呼ばれる山々はひとところまですべて”女人禁制”であった。」⁽³²⁾とあり、それは富士山も同じである。旧記には、「此の山（富士）に女人参らざる也、一月に七日月水に死す。一年中に八十四日の忌、不浄なり。これによって女人は参らざるなり」とある。その北口において、平年は吉田口二合目御室浅間社まで女人の登山を許し、それ以上は女人は通行禁止となったが、富士山の誕生年⁽³³⁾とされる庚申年だけ、四合五勺の御座石浅間の「女人追い立」という所まで登ることが許された。

しかしながら、身祿は従来の富士山の女人禁制に反対であった。封建社会における女人蔑視の思想を、身祿が男女対等に見直し、享保十六年（1732）に自宅の前に「女人登拝解禁の高札」を掲げ、女人登山を認めた。そして、身祿の弟子小谷三志が師の女人解放の教統を受け継ぎ、農民の間に教えを説いた体験から、働く女性の尊さを知り、男女平等を信徒に強く説いていた。漸く天保三年（1832）に、一人の女性信徒を連れ、男装をさせて登頂を成功させた。その後、無制限の女人登山または女性登頂の実現はそれほど順調ではなかったが、社会の面で、富士山の女人禁制に対する態度は少しずつ緩やかになっていった。富士山御縁年の万延庚申年（1860）に『富士山北口女人登山之図』と題する錦絵が売り出され、下の錦絵には山頂まで女人の行列が

(31) 森銑三・鈴木棠三・朝倉治彦編、日本庶民生活史料集成第十五巻『我衣』[M]、三一書房、1971年。

(32) 井野邊茂雄、富士の研究Ⅲ『富士の信仰』[M]、古今書院、1929年、P449。

(33) 伝説によると、人皇六代孝安天皇九十二年庚申年の六月、それまで厚い雲に覆われている富士山が雲霧忽然と晴れて姿を表した。人々はこの富士出現を祝って、庚申年を富士示現の年、即ち誕生年として祭祀を行ってきている。「御縁年」とも言う。これに対して上吉田御師は「富士山御縁年令式」と題する立札に富士山御縁年の趣旨を書いて、江戸市内17ヶ所、千住宿、板橋宿、松戸宿、そのほか、下総・武州・相州・豆州・駿州・甲州の要所に都合33ヶ所立てて、御縁年登山の宣伝を行うのが恒例となっていた。

見える。庚申御縁年にあたって、「男女に限らず信心の輩登山参詣致さる可き者也」と、江戸御府内十四ヶ所と各街道出口の宿場に建てられた「富士山御縁年」の高札に書いてあり、女人登山の許可が公になっていった。

女性に対する、性的差別を脱却しようとする富士講の開放性は、一層多くの女性信徒を集めた。

3 枝講づくり

前掲の富士講系譜に見えるように、角行の教えは、二代日旺、三代旺心に受け継がれるが、五世になって、二派にわかれた。その一派である月旺の系譜は、六世の村上光清(1682—1759)によって「光清派」と呼ばれる一派になり、もう一方は食行身禄の「身禄派」に発展した。光清は豊かな町人であったと伝えられ、吉田口浅間神社を修理したのに対して、身禄は入信後、商売で得た財産のすべてを縁者などに分配し、みずからは髪油・灯油の行商で生活を支えていた。こうした経済力の差もあって、初めは村上派の方が優勢であった。吉田口では「乞食身禄に大名光清」と言われたという。だが、富士講の經典を確立し、数多くの講を発展させ、富士信仰を名実とともに庶民の間に広めたのは身禄派である。それは光清派は枝講を認めなかったのに対して、身禄派はこうした制約がなかったので、多くの枝講を成立させ、信仰が拡大し続けたのと大いに関係がある。

枝講は講の支店と言える。元講から分かれたもので、元・枝講をひっくり返して呼ぶ場合は「〇〇総講」という。また、元講の弟子が独立して一講を立てると、商人の暖簾分けと同じで講印の使用が許される。元講と枝講は親子の関係にあり、枝講同士は兄弟の付き合いをする。江戸時代中期以降、庶民に支持された富士講は現在の渋谷の地でも組織されていった。ここでは、渋谷区にゆかりのある講社を通して枝講づくりの状況を考察しようと思う。

渋谷区にある講は総じて13種ある。その中に、烏帽子岩講⁽³⁴⁾が枝講などを広げた痕跡がないほかに、全部の講社が枝講を持っている。前述の第二章第三節で言及した寛保二年(1742)の御触書に、富士の加持水で病気治癒を行った「富士門弟」があり、これは渋谷区の山吉講⁽³⁵⁾の講員を指していると思われる。天明二年(1782)には、山吉講の枝講は24講に及んでおり、麻

(34) 千駄ヶ谷の鳩森八幡神社にある富士塚を築造した講社である。

(35) 本拠地を渋谷に置き、江戸でも屈指の規模を持った講社である。講祖は食行身禄の直弟子、吉田平左衛門とされている。

布・芝・目黒・品川・赤坂・牛込から、下谷・深川まで広がっていたことが分かる。⁽³⁶⁾ また、身禄の直弟子である小泉文六郎の弟子、渡辺藤八（行名日行八我）が一山講を興し、「元講を青山（現在の青山・神宮前・千駄ヶ谷）に置き、日本橋、坂本町、八町堀、中橋、大師河原、京橋、下谷、松沢、立石などに、多くの枝講を有していた。さらに江戸内に留まらず、神奈川や千葉にも講社を持っていた。」⁽³⁷⁾ という。他の講社も同様に、続々と枝講を出していった。渋谷区は江戸の一部にすぎないが、この一部分の枝講造りの盛況から当時全江戸並びに関八州地域の講の鼠算式の増加を垣間見ることができる。

富士講は町人・百姓という低級なる民衆たちによって発起されたが、展開の段階において、信者の出身に限らず、積極的な布教で知識階級・貴族階級にもその教勢が及んでいたことが分かる。そして、女人登山に賛成し、男女平等の主張で従来の女人禁制の伝統を破り、女性を富士登頂に成功させたことから、次第に女性信徒の支持を得た。さらに、枝講の設立を認め、江戸地域の其方此方に分布した痕跡から見れば、むしろ枝講作りを提唱する態度を取っていたわけで、文化文政期における「江戸八百八講」までの展開を促したと言えよう。このように、多方面において、富士講が講員吸収と組織拡大の過程に開放性を見せ、そのことによって富士信仰の大衆化が少しずつ実現された。

4 運営と活動の簡約性

(1) 人員構成と運営システム

富士講は講元・先達・世話人の三役によって運営される。先達は講社の中心的存在であることは既に述べたが、講元は資金面を担当する代表者であり、先達が講元を兼ねる場合もある。そして、世話人は複数あり、講員の勧誘や講金集めを担う役である。その他に、講組織に隷属しないが、参詣者の案内や宿泊を世話し、御祓などを配り、祈祷を業とする御師も、各講にとって欠かせない存在である。それに、御師は単なる宿屋ではなく、富士講の各講は御師の家に従属し、講先達は御師を「御師匠さま」と呼び、行名授与、

(36) 松井圭太、『渋谷の富士講—富士への祈り』[M]、渋谷区郷土博物館・文学館、2011年、P13。

(37) 同上 P47。

先達号允許などを受けるほか、信仰上の指導はすべて御師の指示に従っていた。また、御師が年一回ないし二回、壇家の家々を廻り、祈祷、配札を行うことである。こういう構成と人員関係は原則として固定され、永続されていた。

ごく簡単な人員構成で、講が立てられる一方、富士講は村から遠く離れた社寺霊山に詣でる代参講の形式を採用し、全講員が旅費を掛け金の形式で、代参者の旅費を賄う仕組みになっているので、講員一人ずつの経済負担が少なくなる。その集金システムとして、おおむね三年ないし五年を一期として講を立てる。講員百人で五年の講が立ったとすれば、年々二十人ずつが登山し、五年で全員の登山が終わると収支決算して一期を終え、次の講員を募って講を立て直す。講員は五年間毎月講金を納めれば、これは自分の登山費用に講の維持費を加味したものを月ごとに払っているわけで、講の年期が長くなれば、毎月の講金は安くなる。さらに、明治時代の山吉講には、実際登山せずに、配札のみを受ける信者の講があるという。このような講には、参加者が払うべき講金が一層安くなる。

要するに、富士講を設立するには、規模の大小を問わず、ただ三役が必須で、組織構成は簡単である。また、集金システムにもかなりの柔軟性があり、信者たちへの資金方面の制限を最小化した、経済力の弱い一般民衆たちにとって誰でも資金方面の負担がなく、気軽に参加できるように立てられている。

(2) 講行事と祭祀用具

少なくとも近世初期までは、清なる霊界の富士山に対する尊敬として、一般に登山をするために、百日の「精進垢離」が必要とされていた。「精進」と言うのは、主として御師家で供与される魚や肉を避けた精進料理を食べることで、そして「垢離」は神仏に祈願する際、水を浴びて心身を清め、一切の雑念を払って精神の集中をはかることである。しかし、富士講の三代目にあたる旺心（1605—1661）は、彼の信者たちに、富士登山前の精進を七日に短縮した。それ以後、重い精進潔斎の代わりに、七日がしきたりとしてなされてきた。

そして、毎年一度の登山活動の他に、定められた日の夜に毎月一回拝みの集会が行われる。講三役のほかに信徒も集まる。「よみ講」などと呼ばれるように、先達の指導で経を読む。経本の底本は角行の創造の御伝えであり、御伝えは折本に仕立てられている。經典は普通巻物になっているが、折本は

巻物と比べて、読み終わって巻き戻さなくても済むことで、見たいところがすぐに開けられる手軽さがある。また、容積は小さくて厚紙であるから形は崩れない。行衣の腹掛けに入れられるもので、携帯にも便利である。

一方、富士講には祭壇の正面に飾るべき本尊がない。それは身禄が絵像木像の使用を認めないからである。その代わりに、「御三幅」といった御身拔、浅間神、小御岳の小幅三枚を並べて掛ける。いずれも 30 センチぐらいの小物である。この三幅を「御身拔箱」という長方形の軸箱に収めて、登山の際に背負ってゆき、山頂でこれを飾り拝む。この祭祀用具の設計も、登拝中に信徒の負担を減少するためである。一切が形式化され、煩わしいものをできるだけ省くところから、富士講の実用的な信仰形態が窺える。

(3) 造られた富士山—富士塚

前記にも述べたが、身禄の弟子たちは講づくりに専念し、その積極的な布教活動は富士信仰の普及を大いに促した。その中に、食行身禄の弟子高田藤四郎は師の三十三回忌に際して、安永四年(1766)にモニュメントとして「富士塚」を築造しようと決め、三年後に完成した。「富士塚」とは、富士を模して築造された山に、富士講員が富士登拝に倣った山筋や社碑名を設けたものをいう。高田富士とも呼ばれ、高田水稻荷境内つまり現在の新宿区西早稲田一丁目に造られた。藤四郎は、富士山を忠実に模倣するために、ジグザグの登山道、御中道⁽³⁸⁾の周回路を造るほかに、山頂に富士山の神元仙大菩薩を祀る石祠を置き、塚の下には里宮を、中腹の身禄入定の霊地鳥帽子岩にあたる場所に立石を置き、そして山裾の右手に胎内を象った洞窟を造った。さらに、植木屋の用語で「黒ぼく」と言われる富士の熔岩石の塊を富士山麓から取り寄せ、これで山体を包んだ。これ以後の富士塚も、甲州から黒ぼくを取り寄せて用いたという。高田富士は江戸で大評判となり、他の富士講もこれに倣い、十年後には第二号となる渋谷区千駄ヶ谷鳩森八幡神社の富士塚が造られた。

このように、富士塚は土着住民の信仰の対象になっていて、それを参詣すれば、富士登拝と同様の御利益があるとされている。交通機関の乏しい当時の情勢として、経済的に恵まれない人、そして婦人・子供・老人や体の弱い人、足の丈夫ではない人は、いかに富士山を信仰する気持ちがあっても、実

(38) 富士の中腹、五合目六合目を一周する道を御中道と称える。

物の山に登ることはできないので、このような人たちに少しでも富士山の山肌を感じさせようという気持ちは藤四郎が富士塚を築造した本来の発願である。さらに、富士塚は富士山に見える場所に築かれることが多いので、講員が富士山を遠望し参拝する場としての機能をも持っている。

その後江戸を中心として、その近郊の各地に築造の習俗が広がっていった。江戸とその周辺の宿駅・農村・漁村地区であった現在の東京 23 区には、江戸時代に既に 20 基の富士塚が築造された。同時に身祿の教えに随う有力先達が現在の神奈川、埼玉、千葉、栃木、群馬県など、江戸周辺部の各地に講の成立に伴って、富士塚の築造を行ってゆくのである。明治時代に至って富士講の教派神道への変身にも関わらず、富士塚の築造が絶えなかった。東京区内に現存するもの 43 基、破却されたものを加えると六十基⁽³⁹⁾に近く築かれている。それに接近各県の分布を合すると 200 ぐらいは現存すると思われる⁽⁴⁰⁾。

東京 23 区内の富士塚の分布



東京 23 区内の富士塚分布地図

東京 23 区内の富士塚の分布図

1. 移転もしくは再築を含め、塚そのものが現存する場合は、赤丸で示し、現存しない場合、または通称として塚と呼ばれていても、塚自体がほぼ失われ石碑が残る程度の場合は、青丸で図上にしめた。また、築造・再築に富士講の関与しない塚については、一覧から除外した。
2. 身祿以後に富士講社（講員）が築造した塚を「富士塚」と定義しているが、身祿以前の模造富士も、この図では一覧に入れた。
3. 身祿以前の模造富士については、現存する場合は、赤三角で示し、現存しない場合は青三角で地図上に示した。

図 4 白根記念渋谷区郷工博物館・文学館編 刊

『渋谷の富士講—富士への祈り』（2010 年）から引用（松井圭太作成図版）

(39) 松井圭太、『渋谷の富士講—富士への祈り』[M]、渋谷区郷土博物館・文学館、2011 年、P90。

(40) 岩科小一郎、『江戸庶民の山岳信仰—富士講の歴史』[M]、名著出版、1983 年、P268。

ところで、富士講の行事に「七富士参り」（「七浅間参り」とも呼ばれる）がある。毎年の六月一日（旧暦）か七月一日（新暦）の山開きの日に、東京都内の各富士塚も山開きをする。この日に各講は自講周辺の富士塚または浅間神社を白装束で七ヵ所巡拝する。この場合、富士塚は信仰の拠り所として扱われている。旅の苦労をせずに、誰でも容易に富士山に親しめるようになった。

有力先達の活躍さらに講勢の拡大などの理由が富士塚築造の気運をもたらしたと思われるが、却って富士塚の築造と増加は、実物の富士山に登れない人の夢を叶え、富士信仰を信徒の身近に置き、その親民性を増やしたため、信仰の普及に大きな役割を果たしていたと思う。富士講の衰退、そして廃絶にも関わらず、富士塚は近年になって重要視され、「重要文化財」「有形文化財」として保存されてきた。富士塚を中心とする七富士参りは現在でも東京、神奈川、埼玉などの各地で行われている。

一般信徒たちにとって、煩わしい教規を抜き、信仰を通して生活上に実際の利益、及び精神上的の慰めと指導の獲得が一番望ましいことである。従って、講づくりには、組織者があらゆる手続き、祭祀用具と登拝活動をできるだけ簡略化しようとし、信徒に対して用心深く気を配っていた。このような富士講の簡約性は富士信仰の大衆化を実現したもう一つ重要な要素であると思う。

近世から、山岳信仰関係の講組織が多く結成されたが、富士講が飛躍的な発展を遂げ、その中の代表とも言われる。その理由は言うまでもなく日本一の富士山に対する畏敬と憧憬の念が日本人に共通しているからである。しかしながら、江戸時代から封建経済の衰退と江戸中後期から幕府政治体系の崩壊における社会的矛盾の激化、そして講組織自体の性格にも注目すべきであると思う。その救済性は、信徒たちの信仰動機を満たしたゆえに、信徒の増加を実現した。そして、開放性は組織の拡大と講員の増加に大いに貢献し、講の規模が拡大しつつあった。さらに、富士講の簡約性で、新たな講組織の結成、並びに現有した講員の保持や組織の順調な運営が確保された。このように、長年の布教と模索で、富士講自体の成熟した運営システムが次第に作られた。要するに、救済性・開放性・簡約性を備える富士講の組織構成と運営システムが江戸時代における富士講の隆盛、さらに富士信仰の大衆化を大いに促したと思う。

終わりに

古代より崇高な山であった富士山は、神体山（即ち禁足地）であり、麓にて祭祀が行われ、遥かにその姿の見える場所から遥拝されてきた。時代が下り、仏教の伝来を経て、また修験道などの影響を強く受け、修行を通して超自然的な力を得ることを目的とする富士修験道がますます流行になった。そして、登山施設や登山習俗の成熟化に伴い、室町時代には信仰登山の風潮が盛んになってきた。江戸時代になると、庶民に信仰が広がるにつれて、お金を集め、代表を選び、皆の祈願を託す「講」の仕組みを利用するに至った。このような情勢の中で、富士講は江戸を中心に各地域で、急速に展開した。この展開に伴い、富士信仰が名実とともに一般信者の生活に浸透し、広く受容されるようになった。明治時代になって、江戸時代に隆盛を極めた富士講は、明治政府の宗教政策でその一部が教派神道に変身したが、全体は衰退の一途を辿った。特に、現在では都市化の展開と富士登拝の娯楽化と共に、富士講の大部分が消滅した。しかし、富士山に対する信仰は国民の生活に潜りこんで、現在にも影響を及ぼしている。今の交通の発達などに恵まれ、富士登拝は娯楽化されている。毎年夏に行われている「富士開山祭」⁽⁴¹⁾と「鎮火祭」⁽⁴²⁾は国家安穏と登山者の平安を祈願するだけではなく、国内外の人々が富士山に親しまれる年ごとの大盛事でもある。また、周知のように、富士山が2013年に関連する文化財群とともに、「信仰の対象と芸術の源泉」の名で世界文化遺産に登録されて以来、信仰の拠り所としてますます重視されてきている。

中国において、富士信仰に関する研究が極少数であることに対して、本稿は富士信仰の代表民間団体である富士講を研究対象として、その組織運営に対する考察から、富士信仰の大衆化の解説を試みた。結論として、江戸時代中期以後の激動な社会背景に、富士講自体が救済性・開放性・簡約性といった三つの特徴を備え、民衆たちの信仰動機を満たし得たため、一般庶民の中に浸透できたのだと思う。

(41) 毎年の7月1日に吉田登山口の入口である北口本宮富士浅間神社は、富士山と関わりの深い人たちが集まり、開山祭を斎行。最初は手と口を水で濯ぎ、御祓の儀式が行われます。それから拝殿に上がり、富士山に感謝をし、多くの人の無事を祈ります。

(42) 北口本宮富士浅間神社とその摂社である諏訪神社の祭として、現在は「鎮火祭」という名称で8月26日の2日に亘って行われ、特に8月26日の夜、町中で大松明が焚き上げられる、富士山のお山じまいの祭として知られています。

本研究において、筆者は富士信仰の大衆化に着目し、時代の流れに沿って、江戸時代における富士信仰の大衆化の要因を富士講から考察した。しかし、力不足で、分析と論述の足りないところがお沢山あると承知している。今後の課題は本研究をさらに深めることである。そして、富士信仰のほかに、日本の多種多様な山岳信仰に対して、研究を広げ、特に富士講と類似した他の山岳信仰の団体をも研究対象として、比較研究を進めていきたい。そして、できるならば、中国の山岳信仰と日本の山岳信仰とを合わせて、比較研究を行い、中日両国の原始的な自然信仰—山岳信仰の異同点を捉えたいと思う。

参考文献

著作：

- [1]和歌森太郎編. 山岳宗教史研究叢書1『山岳宗教の成立と発展』[M]. 名著出版. 1979年
- [2]平野栄次編. 民衆宗教史叢書第16巻『富士浅間信仰』[M]. 雄山閣. 1987年.
- [3]井野邊茂雄. 富士の研究 I 『富士の歴史』[M]. 古今書院. 1928年.
- [4]井野邊茂雄. 富士の研究 III 『富士の信仰』[M]. 古今書院. 1929年.
- [5]岩科小一郎.『江戸庶民の山岳信仰—富士講の歴史』[M]. 名著出版. 1983年.
- [6]佐々木千代末. 『民衆宗教の源流』[M]. 白石書店. 1983年.
- [7]安丸良夫・村上重良編. 日本思想大系67『民衆宗教の思想』[M]. 岩波書店. 1971年.
- [8]安田喜憲. 『山岳信仰と日本人』[M]. N T T. 2009年.
- [9]天野紀代子・澤登寛聡編. 『富士山をめぐる日本人の心性』[M]. 法政大学国際日本学研究所. 2007年.
- [10]柳田国男. 『山宮考』[M]. 小山書店. 1950年.
- [11]小田全広. 『富士山が世界遺産になる日』[M]. P H P 研究所. 2006年.
- [12]下出積興. 『古代日本の庶民と信仰』[M]. 弘文堂. 1988年.
- [13]小口偉一. 『宗教と民衆生活』日本宗教史講座第三巻[M]. 三一書房. 1959年.

- [14] 宮田登・塚本学編. 日本歴史民俗論集10『民間信仰と民衆宗教』[M]. 吉川弘文館. 1995年.
- [15] 堀一郎. 『民間信仰』[M]. 岩波書店. 2005年.
- [16] 鈴木昭英編. 山岳宗教研究研究叢書9『富士・御嶽と中部霊山』[M]. 名著出版. 1979年.
- [17] 青弓社编辑部編. 周以量译. 《富士山与日本人》[M]. 社会科学文献出版社. 2010年.
- [18] フォイエルバッハ著. 王太慶訳. 『宗教の本質』[M]. 商务印书馆. 2010年.
- [19] 文化庁編. 『日本民俗地図』Ⅲ[M]. 国家地理協会. 1971年.
- [20] 森銑三、鈴木棠三、朝倉治彦編. 日本庶民生活史料集成第十五巻『我衣』[M]. 三一書房. 1971年.
- [21] 松井圭太. 『渋谷の富士講—富士への祈り』[M]. 渋谷区郷土博物館・文学館. 2011年.
- [22] 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広編. 新編日本古典文学全集6『万葉集』[M]. 小学館. 1994年.

論文：

- [1] 頼麗雨. 『日本における富士山像について』[D]. 山东大学硕士学位论文. 2013年.
- [2] 唐千友. 日本汉诗中的富士山形象研究[J]. 安徽大学学报. 2012 (06) : 72-79.

辞書：

- [1] 子安宣邦監修. 『日本思想史辞典』[M]. ペリかん社. 2001年.
- [2] 松村明編. 『大辞林』第三版[M]. 三省堂. 2006年.
- [3] 新村出編. 『広辞苑』第五版[M]. 岩波書店. 1998年.

ウェブサイト：

- [1] 近世日本山岳関係データベース[DB]<http://moaej.shinshu-u.ac.jp>
- [2] 国立国会図書館デジタルコレクション[DB]<http://dl.ndl.go.jp>
- [3] 富士山本宮浅間大社ホームページ[OL]<http://fuji-hongu.or.jp>
- [4] 北口本宮富士浅間神社[OL]<http://www.sengenjinja.jp/index.html>